ことばの力

「あいさつ」というと、ふっと思い出す一人のおばあさんの姿があります。わたしはぶらぶら散歩するのが好きで、その日によって、あの道からこの道へと、コースを変えて楽しみますが、わたしの家から十五分くらいのところの道端の家の門に、午後、おばあさんが立っていました。いつもなのです。あまり人の通らない狭い道路で、わたしが通りかかると、おばあさんは、にこにこなさいました。わたしも、なんとなく、軽く頭を下げて通り過ぎました。

そんなことが、ひと月近く続いたでしょうか、ある日、そのおばあさんが亡くなられたことを知りました。

そうだったのか、とわたしは思いました。おばあさんは、門のところに立って、世の中へ「さようなら」を告げていらしたのだ。あの世へ旅立つ前に。

おばあさんの、その「あいさつ」は、知らない人たちへも、無言のうちに告げられていたのだと思います。そればかりでなく、おばあさんは、木にも鳥にも家の屋根にも、空にも雲にも風にさえも、「さようなら」を告げていらしたのではないでしょうか。

わたしは、その門の前を通ると、よく、そのおばあさんの姿を思い出し、

あの頃、ただ儀礼的に軽く頭を下げただけの私が、なんとなく恥ずかしくなります。正直にいうとわたしは、そのことをわずらわしく感じて、散歩のコースを変えたことさえありました。

ですから、「あいさつ」のことばをめぐって、えらそうなことを述べる資格はないのかもしれません。しかし、どうやら言えることは、「あいさつ」というのは、その根もとのところは、ことばづかいより、その人の気持ちの持ち方だ

ということです。

他人ということばがあります。ずい分冷たいひびきのあることばです。他の人という意味であるにすぎないはずなのに、なにか、「人を見たら泥棒と思え」というような、人を敵視する気持ちの構えを感じて悲しくなります。

（川崎洋『ことばの力　しゃべる・聞く・伝える』より）